

研究課題	絵本とタブレットを活用した外国語教育の充実
副題	～楽しみながら言語感覚を育む～
キーワード	英語 教科横断的 カリキュラム・マネジメント 絵本 タブレット 言語感覚
学校名	私立北陸学院小学校
所在地	〒920-1396 石川県金沢市三小牛町イ 11 番地
ホームページ アドレス	http://www.hokurikugakuin.ac.jp/primary/

1 はじめに — 研究の背景 —

1、2年生では週に1時間、3、4年生では週に2時間、5、6年生では週に3時間の英語の授業を行っている。昨年度から、Oxford Reading Tree（以下 ORT）という絵本を取り入れ、英語絵本の音読によって「楽しみながら言語感覚を養い、英語を学ぶ」環境を整えてきた。ホームページ上にあるオーディオデータをお手本として、児童は家庭学習として音読をおこなっている。2年生の児童でも、ラッコが貝を割っている姿の絵に「crack!」と書かれていると、ラッコが貝をたたきながら割る様子をイメージしながら「割れること」と「crack」をつなげて理解できていた。辞書を引きながら学ぶ外国語という形ではなく、絵や音を頼りに絵本を楽しみながら外国語を学ぶ機会をより多く作りたい。

また、絵本の世界を楽しみながら英語に触れるだけでなく、普段の学校生活の中で用いている言葉をそのまま英語にして表現する機会を増やせないかと考えた。本校は自然に囲まれた環境の中にあり、四季の移り変わりを常に身近に感じることができる。校庭では、桑の実やグミ、木イチゴや栗などが実り、春、夏、秋、冬と移り変わる自然の草花の様子を観察したり、夜空に広がる星座を観察したりする学習活動がある。休み時間には昆虫採集を楽しみにしている児童もいる。国語では四季の詩や俳句を作る学習、生活科では自然との関わりでの学習など、さまざまな教科で本校の自然の良さを言語化する学習活動を行っている。そこに「英語で表現する」ことも加えて他教科との連携の授業を行うことで、より英語に親しみをもち、楽しみながら学べるのではないかと考えた。

2 研究の目的

副題にあるように「言語感覚を育むこと」がこの研究の目的である。では、言語感覚とは、小学校学習指導要領（平成29年改訂）解説・国語編にある「言語感覚」と同じ定義とする。「言語感覚とは、言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のこと」とある。日本ではシンガポールやマレーシアなどのように生活の中で英語が使われているわけではないため、英語に触れる機会を作らないと、なかなか英語を見たり、聞いたり、話したり、読んだりという機会はない。そのため、「言語感覚」まで育むことは難しい環境である。しかし、良質な語彙、児童に身近な語彙に楽しく触れさせ、用いることで、より英語に親しみを持つ機会を作っていきたい。

また、生活科で四季の様子を言語化した表現活動や、国語の物語の単元で行った表現活動、街の良さを紹介する表現活動、社会科で学んだ世界のことをクイズにするなどを、英語にして行うことで、英語を外国語としてではなく、伝え合う言語の1つとして捉えやすくなるを考える。

以上のことから、本研究では、英語を科目の一つとしてではなく、絵本の中の言語として見たり、聴いたり

して、また、伝え合う言語としてさまざまな教科の中で関連付けて用いることで、英語に触れる機会が少ない日本においてより英語に親しみをもちながら、外国語教育を充実させ、言語感覚を育む要素の一つとなりうることを明らかにする。

3 研究の経過

今年度は、以下の内容で取り組んだ。

時期	学年	取り組み内容 (関連教科)	評価のための記録
5月	5, 6年	英語絵本に関するアンケート調査	アンケート
9月	全学年	夏休みの課題絵本の暗唱発表会	記録 (教師の評価)
9月	5年	『葉っぱのフレディ』から英語表現を学ぶ。(国語)	写真
10月	6年	オーストラリアからの姉妹校の児童に石川県を紹介する。(総合・国語)	ポスター 振り返りシート
11月	6年	<i>The Wizard of Oz</i> 英語劇の発表	映像
11月	1年	小学校の周辺で見つけた物を英語で紹介する。(生活科)	写真、絵
1月	2年	お手紙 <i>The Letter</i> の英語劇 (国語・図工)	映像
2月	全学年	音読発表会	映像、振り返りシート
年間を通した取り組み			
	5年生	2言語での絵本の読み聞かせ	アンケート
	全学年	英語音読宿題	Reading Report
	全学年	スカイプセッション	アンケート

4 代表的な実践

4.1 『葉っぱのフレディ』・ *The Fall of Freddie the Leaf* (Leo F. Buscaglia)から英語表現を学ぶ (5年)

本校では、「見つけたワード」という気になる言葉をカードに書いて集める学習活動を行っている。授業の中で取り上げる言葉や、読書の中で出会った言葉など好きな言葉、気になる言葉を書きとめていいことになっている。5年生のカードを夏休み前に回収して確認したところ、四季を表現する詩や俳句を作る際に、1つひとつの言葉とじっくり向き合う時間が多いからと考えられるが、季節の言葉に注目している児童が多いことが分かった。そこで、木の葉が主人公となり、木から離れて落ちる「死」と向き合う物語、「葉っぱのフレディ」を日本語と気になるフレーズや文章を英語で読む学習を行った。4月、5年生の教室の窓からは、満開の桜が見える。その桜の木は夏には蝉の鳴き声が聞こえる中、青々とした葉っぱとなり、その後は少しずつ紅葉していく。冬休み前には、その木に葉っぱは一枚もない。『葉っぱのフレディ』を学習した後に行った秋の詩の学習では木の葉の視点を学んだことから、資料1のような詩の作品も書き上げられた。

資料1 児童の詩 (秋)

一本の 枝から兄弟 旅だった さようなら 枝から兄弟 見守る木
--

主人公の心情を読み取った後、四季の移り変わりが多く表現されている中から、自分が実際に見てみたい情景の表現を選び、その部分を英語で読む学習活動をおこなった。9月だったため、まだ紅葉が始まっていなかったが、多くの児童は、絵本の中から紅葉の様子を選んでいった。フレディの友だちがさまざまな美しい色に変わっていく場面である。11月、その場面がイメージできる実際の風景を校庭で見つけてタブレット端末で

写真に撮った（資料2）。英語の表現、日本語の表現、そこに映し出されるイメージをそれぞれの個性に応じた写真を残すことができた。

日本語で十分に内容を理解した後に、英語の絵本を見て自分が選んだ表現を探していく。全ての単語を読むわけではないが、紅葉の様子が色を用いて表してあり、児童に身近な単語だったこと、また絵本の構成が日本語も英語も同じだったため、ページ数が分かれば、そこから探すことができたため、児童は自分たちで言葉をたどりながら英語の文章を探すことができた。また、児童が撮った写真にはさまざまな紅葉が写し出され、国語と英語、両言語で秋を楽しむことができた。

資料2 『葉っぱのフレディ』の秋の様子を探した写真と秋の表現



Alfred had turned a deep yellow.
Ben had become a bright orange.
Clare had become a blazing red,
Daniel a deep purple and Fredric was
red and gold and blue.



Almost at once, the whole tree, in fact, the whole park
was transformed in to a blaze of color.



"Each of us is different. We have had
different experiences. We have faced the sun
differently. We have cast shade differently. Why
should we not have different colors?"

4.2 オーストラリアの姉妹校の児童に石川県を紹介する（6年）

オーストラリアのシドニー近郊に姉妹校があり、1996年から姉妹校として関係を築いている。オーストラリアからは2年に一度本校に来校、本校からは3年に一度オーストラリアの学校を訪問し、またスカイプを通して交流を深めてきた。今年度は10月にオーストラリアから19名の5、6年生が来校した。2日間学校で交流し、本校の児童の家にホームステイをする。いつもは習字やけん玉など日本の文化と一緒に体験したり、遊んだりすることで2日間交流していたが、今年は、英語で石川県や金沢、日本の食材についてクイズ形式で紹介するポスターを作成して、オーストラリアの児童が使用する部屋に掲示した。6年生は、国語の「町のよさを伝えるパンフレットを作ろう」という単元で、金沢について調べていたので、それを英語のクイズにして英語で表現した。5年生はスーパーに行って日本の食材を紹介することになっていたため、日本の食材に関連するクイズを作った。オーストラリアのお友だちが分かりそうで分からないクイズにするためには、何をどう用いたらいいのか。写真があったら分かりやすい、日本の代表的な食べ物と言ったら、何があるか。自分たちが好きなおやつも紹介しよう。など、児童はさまざまなアイデアを出しながら、タブレットで情報を集めながら、効果的に編集してクイズを作成することができた。

始めに児童は This is ～など知っているフレーズを用いながら文章を考えていたが、作られる、使われるなどはどう書いたらいいのかという質問があり、This is made from fish.など「～される」の表現（受動態）も教える機会となった。ポスターを見たオーストラリアの子どもたちは、クイズを楽しみ、またそのポスターを通して児童同士がコミュニケーションをとるきっかけとなり、自分が書いた英語が「伝わる」ことを経験した。

4.3 スカイプセッション（6年）

姉妹校とは、スカイプでも年に1、2回交流している。6年生は6月、5組のペアで世界の国々についてクイズを出した。It's the biggest country in the world. The population is 5 hundred and fifty million people.など、少し難しい表現もあったが、児童の「伝えたい」という思いが学ぶ意欲となり、世界で一番大きい、広い、高

いなど最上級の表し方も知る機会となった。同時に、社会科などで学習した内容を、英語を用いて実際に伝え合うことができ、児童の日本語での学びに英語表現を重ねる活動となった。

また、11月（対面で交流した1ヶ月後）にはオーストラリアの児童が日本語で学んだ食べ物、動物、スポーツの写真を見せながら、それらが好きかどうかを尋ねる交流をおこなった。以下は、児童の感想である。

「今回は日本語で会話する Skype だったが、日本語での会話でつまるところがあったから、自分が英語で話す必要があると思った。海外の方と会話することによって、英語への関心、外国の身近さを感じるようになったように思う。海外への興味関心が Skype によって高まっている。」

「いつもは楽しめない（楽しむ機会がない）外国のノリを楽しむことができた。前回ホームステイに来たお友だちがいてうれしかった。私たちは英語を学校で週に3回習っているけど、オーストラリアのお友だちは週に1回しか習わないけど、今日私たちと会話していて、日本語が上手と思った。」

6年生11名のクラスでスカイプセッションの後に表

1の示す3つの質問を5件法で尋ねたところ、表1のような結果になった。どれも肯定的に答えているが、特に質問1と質問2の結果を比較すると、英語の授業、英語の学習をあまり好きではない児童でも、スカイプの交流は好きだと回答する傾向が大きいことが分かった。質問3からは、相手がいる「伝わった」、「分かり合えた」を経験することが英語をがんばろうという内発的動機づけの要素となっていることが明らかとなった。

表1 スカイプセッション後のアンケート調査

質問事項	結果
1.英語が好きですか。	3.8
2.スカイプセッションは好きですか。	4.4
3.スカイプセッションの後、英語をもっとがんばろうと思いましたか。	4

現在、スカイプセッションはクラス単位で行っている。両校の長期休業や、授業の調整をしながらスケジュールを組んでいる。個人個人の課題や、オーストラリアの日本語の授業との調整も出てくるため難しい面も多々あるが、両校の機器が整えば1人ずつのスカイプセッションも可能となるのではないだろうか。

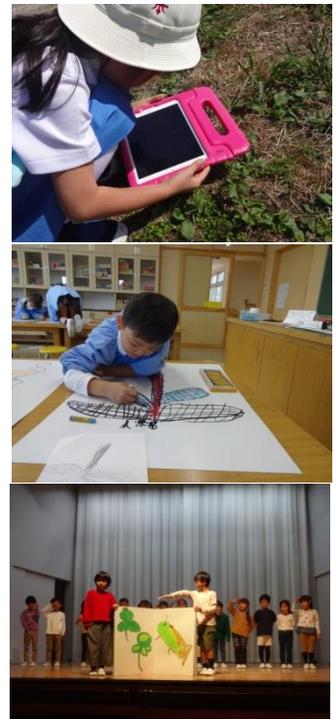
4.4 小学校の周辺で見つけた物を英語で紹介する。(生活科) (1年)

1年生は「ミッケ！」をテーマに、生活科の授業「学校探検」をしながら自分が見つけたものをタブレットで撮影してきた。また、撮影した写真を再生し、互に見つけたものを共有する時間も設けてきた。11月の学習発表会では、毎年、1年生は英語発表をしており、今年は子どもたちが「ミッケ！」で見つけたものを英語で発表することを計画した。「四つ葉のクローバー」「トンボ」「きのこ」「どんぐり」などをみつけた子どもたちからは、「絵をつなげて絵本にしたい」というアイデアが出たため、1年生16人が描いた16枚の絵を繋げてビックブックを作成することにした。また、みつけたものを英語で話す際には、絵本『くまさん くまさんなにみているの』の英語版「Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?」のフレーズを参考にし、英語のやり取りを楽しめるように、会話でストーリーを展開できるようにした。例えば、以下のような例文である。

クラスの子どもたち全員：“Minato, Minato, what do you see?”

Minato：“I see a swing in front of me.”

発表者が交替するタイミングをつかむため、ウッドブロックでリズムをカウントした。それが、英語のフレーズのリズムと合うチャンツになっていたため、リズムカルに言うことができたようであった。1年生は英語の時間が週に1回なので、英語の先生がタブレットで録音してくれたフレーズを授業中や休み時間に聴いて練習した。



4.5 お手紙 The Letter の英語劇（国語・図工）（2年）

2年生の国語の教科書には『お手紙』（*Frog and Toad are Friends* の The Letter の日本語訳）の単元がある。例年、児童は登場人物になりきり、劇化して物語を楽しみながら学習している。今年度はそれに加え、場面ごとにグループを作り、がまくん、かえるくん、かたつむりくんのセリフだけを英語にしてパペットを用いて劇化した。すなわち、国語では音読劇を行い、図工では自分の役柄のパペットを作り、英語ではそれぞれのセリフを学んだ。お手紙がなくて悲しむ「かえるくん」、それを励ます「がまくん」の様子は日本語で言葉に表現をのせる練習を充分に行っていたため、英語でも表現することができていた。

また、タブレットで撮ってその様子を児童と確認することで、児童はよりよくしようと自分たちでアドバイスをし合いながらパペット劇を完成させていった。また、撮影したのを見た後には、児童の声がより大きくなっていたり、あるグループが自分たちで「お手紙」の小道具を作ったりと、主体的に学びを深めていく様子が印象的だった。

4.6 2言語での絵本読み聞かせ

本校では、保護者のご協力のもと、「山のおはなし会」という読み聞かせを月に一回おこなっている。その際に5年生（20名）では日本語と英語の2言語で表2の絵本の読み聞かせをおこなった。内容を知っているお話、児童にとって親しみのない言葉が多く出てくる絵本は日本語、英語の順に一文ずつ読み、理解しやすい絵本は英語、日本語の順に一文ずつ読んだ。

表 2 2言語で読み聞かせをした絵本

4月	3びきやぎのがらがらどん	The Three Billy Goats G ruff
5月	スイミー	S w m m y
6月	ちいさなちいさなめにみえないびせいぶつのせかい	T iny Creatures: The W orld of M icrobes
7月	どこいったん	I W ant M y Hat Back
9月	ぼちぼちいこか（英語でも読める）	W hat Can a H ppopotam us be?
10月	いちばんのなかよしさん	F r i e n d s
11月	イソップ物語	The W olf and the Birds' The W olf in Sheep's C lothing' The Ants and the G rasshopper'
12月	きぼうころろひらくとき	H ope is an O pen Heart
1月	ねえ、どれがいい？	W ould You Rather...

児童にどの本が一番印象に残っているかを尋ねたところ、上位は『どこいったん』、『スイミー』、『3びきやぎのがらがらどん』、『ぼちぼちいこか』であった。理由は、「内容や絵がおもしろい」、「お話がおもしろい」、といったものから、「日本語の表現とは別の表現で楽しい」、「言葉の表現が違っていておもしろいと思った」、「日本語で書かれていないことが英語では書かれていたから」、英語の単語がいろいろあって勉強になったから」、など英語の表現を意識しながらお話を聞いていることが分かる。上位に入った『どこいったん』と『ぼちぼちいこか』は関西弁で書かれていることから、児童の印象に強く残ったとも考えられる。

また、「これからも日本語と英語の絵本の読み聞かせがあったらいいと思いますか。」という質問には8割にあたる16名が「はい」と答えている。その理由は、「日本語でいつも聞いている言葉が英語で分かるから」、「この日本語はどんな英語だろうといつも気になってくるから」、と英語ではなんというのか知りたい、という学ぶ姿勢を持ちながら2言語での読み聞かせを楽しんでいることが分かる。

2言語で読み聞かせをすることは、児童がお話の内容と重ね合わせて英語を学ぶことができるため、効果的な学習方法だと考えられる。

4.7 英語音読宿題

今年度は ORT の絵本を 1 年生から 6 年生まで副教材として取り入れた授業を行ってきた。今年度は、年間で 20～30 冊の絵本を読んだ。1 週間の家庭学習で絵本をみながら音声を聞いたり、音声を聞きながら絵本を音読したりする。火曜日を絵本の交換日とし、授業の中では練習してきた絵本をクラスでみんなに読み聞かせしたり、絵本の中からフォニックスを取り上げたり、5W1H の質問を出したりしている。5、6 年生では、自分たちの声をタブレットに録音してより発音やイントネーションをよくするために自分で確認する時間を設けた。5 年生 20 名を対象に 12 月に「自分の声をきいて、もっと上手になりたいと思った」かどうか 5 件法で尋ねたところ、4.5 と非常に高い点数となっており、だれかに聞いてもらうだけでなく自分の声を自分で聞くことで、より学ぶ意欲を高められると考えられる。

また、夏休みにも絵本を 1 冊読むことを課題とし、夏休み明けに暗唱大会を行ったところ、40 日近くを練習期間とすることができたため、大会後には児童が達成感を得ることができる学習となった。また、他者が発表する様子を見ることで、「自分にもできそう」と感じた児童が多く、その後はこれまで以上に積極的に取り組むようになった児童もいた。

5 おわりに — 研究の成果・今後の課題と展望 —

本研究では、児童のふだんの日本語での学びや生活を土台として、その場面に英語表現を重ねることで、実感の伴った英語学習につながる言語感覚を育てることを目指した。タブレットのカメラ機能や動画撮影機能を活用することで、児童の見つけたもの、経験したことを素材に英語で表現し、友だちに伝えたり、英語の表現を感じたり、楽しんだりする活動にすることができた。さらに教科横断的な取り組みで学習を深め外国語教育の充実を図ることができた。

そこには「言語活動」が必ずあり、小学生で学ぶ英語であってもやはり国語と同じように、伝え合う言語としての英語が存在する。校庭での遊びの中で「これは英語で何というのだろう。」と疑問をもつようになった 1 年生、社会の知識をオーストラリアのお友だちと共有することで伝え合う喜びを感じた 6 年生の様子から、児童の生活環境の中に、伝え合う言語として英語を捉える場面を増やすことで、英語をより身近に感じ、親しみをもって学んでいくことができると考える。たくさんのことを見て、感じて、吸収していく小学生時代だからこそ、言語感覚の基礎となる部分に外国語の要素を含ませることで、言語に対して敏感になることができると考える。

今後の課題は、児童が作成したデータの管理、クラウドの使用方法など児童の成長記録、学習記録をどのように残していくかということだ。データを仕分け、整理し 6 年間管理していくことで、卒業時には 6 年間の学習記録としてポートフォリオの形にできないかなど、ICT の使用について今後も継続して研究していきたい。